

仁科記念財団

案 内

1991年 6 月

追 補

1991年10月

財団法人 仁科記念財団

「案内'91年版」は6月12日に行われた理事会・評議員会より前に作られたものであり、その後、二、三の点で記述を改める必要が生じました。その第一は、「寄附行為」についてです。19ページ記載の条項：

「第5条 この法人の資産は、次のとおりとする。

1. この法人設立の当初に仁科記念財団設立発起人会が寄附した別紙財産目録記載の財産

2. 資産から生ずる果実
3. 事業に伴う収入
4. 寄附金品
5. その他の収入」

における「4. 寄附金品」の次に「5. 賛助会費」が加えられ、従って「5. その他の収入」は「6. その他の収入」と変えられました。そして、その「賛助会費」を納める会員に関しては、新たな章が、「第5章 会議 第25条～第28条」（「案内'91年版」21ページ所載）の後に、次のように加えられました：

「第6章 賛助会員

第29条 この法人に賛助会員をおく。賛助会員は、この法人の趣旨に賛同する団体、法人または個人であって、別に定める規定により賛助会費を納入する者とする。」

そして、従来の第6章、従来の第29条以下の各章、各条の番号が1ずつ繰り下げられました。この変更、すなわち賛助会費制の導入は、上に述べた理事会・評議員会の議を経て、文部大臣の認可を受けました。「案内'91年版」22ページ最後の行「平成2年7月27日 一部（評議員の定数）変更認可」の後に、次の1行が加わります：
「平成3年7月8日 一部（賛助会費制の導入）変更認可」

「寄附行為」の記述のなかで変更すべき点は以上のとおりです。ところで「寄附行為」の新「第29条」において「別に定める規定により」とされている「規定」は、次のように定められました：

「賛助会費に関する規定

1. 団体、法人の年会費 1020万円
50以内
個人の年会費 101万円
2. この規定は理事会の議を経て変更することができる。」

上述の理事会・評議員会においては、また、理事・評議員の異動と補充に関する決議が行われました。なお、その後、9月10日監事瀬川美能留氏が逝去されました。これらの異動の結果を示すために1991年9月30日現在の新しい名簿を次に掲げます。

役員および評議員名簿

(1991年9月30日現在)

理 事 長 久保 亮五

常 務 理 事 鎌田 甲一 玉木 英彦 西島 和彦

理	事	伊藤 昌壽	井上 薫	太田 清蔵	小田 稔
		鹿島 昭一	佐波 正一	齋藤 裕	中根 良平
		鳩山 道夫	浜田 達二	林 主税	原 禮之助
		平岩 外四	三浦 功	三田 勝茂	森 英雄
		吉野 照蔵	渡里杉一郎		

監 事 池田 長生 小山 五郎 佐々木秋生

評 議 員	有山 兼孝	岩佐 凱実	植村 泰忠	江口 禎而
	江戸 英雄	岡本 耕輔	金森順次郎	上坪 宏道
	木越 邦彦	小谷 正雄	小林 稔	坂井 光夫
	佐田登志夫	杉本 正雄	鈴木 増雄	関本 忠弘
	曾田 範宗	高木丈太郎	竹内 征	竹中 鍊一
	田島 英三	田中 靖郎	豊沢 豊	西川 哲治
	仁科雄一郎	西村 純	早川 幸男	弘世 現
	藤井 忠男	伏見 康治	丸森 寿夫	宮 憲一
	宮崎友喜雄	宮沢 弘成	宮島 龍興	山崎 敏光
	芳田 奎	和田 昭允		

再 録 の ペ ー ジ

毎年の「仁科記念財団案内」の内容の大半は重複していますが、前のものを読む機会がなかった新しい読者にとって興味があると思われる話も載っておりますので、今回再録してお目にかけることになります。

まず、1990年版所載の「談話室」のまえがきを再録し、そこに載っている「ボーアのことは」と題する文章を掲げます。

「談話室」のまえがき

仁科記念財団の広報誌“NKZ”の創刊後まもなくの頃には、「談話室」欄を数々の貴重な文章が飾っていました。たとえば第2号の長岡治男氏（当時理化学研究所理事長）の「理研の現状と抱負」、第3号の山崎文男氏（当時仁科記念財団常務理事）の「アイソトープとともに10年」、第5号の我妻栄氏（当時仁科記念財団理事）の「頭脳労働はタダか？」等。降って第15号にも、茅誠司、瀬藤象二、中泉正徳3氏の座談会（山崎文男氏司会の「アイソトープ協会の創業の前後」）、第18号の「ドイツからの引上げ船上の手紙、朝永博士から仁科博士へ、1939年9月13日、靖国丸船上ニテ」のような資料的に注目すべき記事が載っております。それと同じ役割を果たさせるために、この「案内」にも「談話室」欄を復活させました。財団では、「仁科生誕百年」にそなえて史料室の整備に励んでいますが、「談話室」欄に、資料の一端を載せて、関心をお持ちのかたに読んでいただくことにいたします。

ボーアのことば

5年前、ニールス・ボーア生誕百年にあたりコペンハーゲンで行われた記念行事の際に、ボーアの業績と波乱に満ちた生涯をえがいたフィルムが上映され、世界各国から集まった人々の耳目を引いた。デンマーク政府が作らせたこのフィルムは駐日デンマーク大使館にもたらされ、仁科記念財団、日本学術会議、日本物理学会三者共催のわが国における記念講演会には間にあわなかったけれど、その年の定例仁科記念講演会や翌年の日本物理学会年会では、仁科記念財団が大使館から借りて上映した。その後、財団はデンマーク政府からこのフィルムを購入して、大学や研究所と合同の集会で上映するようにしている。

このフィルムは上下2巻から成り、上巻はボーアの研究所の国際研究協力の有様を生き生きと描いており、下巻はボーアが大戦の終る前から戦後の核兵器競争を憂慮しておこなった活動を扱っている。その活動の頂点にあるのが1950年朝鮮戦争勃発の直前に出された「国連への公開状」である。その公開状でボーアが言おうとした真髄をボーアはデンマーク語で語っており、字幕にその英訳がつぎのように示されている。

To immerse ourselves in such problems ...
 in such sources of misunderstanding
 between human beings of different cultures ...
 one would hope ...
 to point out one way in which to improve
 the relation between people.
 This understanding is nowadays more needed than ever,
 for scientific development now hold out such great promise
 for improving the condition of mankind.
 Yet, at the same time, this makes it more imperative than ever,

that we, on this little globe, find ways towards
peaceful cooperation to develop and advance
our common human civilization.

It is not least within the field of science

that we dare hope for cooperation,

because maybe here, more than in any other human sphere,

we feel ...

in spite of differences ...

that we are striving towards the same goal :

To increase our experience and enlarge our understanding
of that nature to which we all ourselves belong.

「談話室」のまえがきは、NKZ の旧い号に載った幾つかについて言及しています。ここではそれらのうち二つ—— a. 第15号所載の座談会記録および b. 第18号所載の「ドイツからの引上げ船上の手紙」——を再録しましょう。

a. 第15号所載の座談会記録

仁科芳雄博士が当時としては世界で第一級のサイクロトロンを建設されたのは、生物学・医学等への広い応用を考えられてのことでしたが、戦後それを用いて国の復興に貢献しようとした矢先に、米軍に撤去されてしまいました。しかしそれにもめげず、博士は宿願をはたすために、米国オークリッジでつくられている放射性アイソトープを占領下の日本でも使えるよう、許可の申請を超人的執念で繰り返されました。その交渉に山崎文男博士は助手をつとめ、また師の歿後その遺志をついで、その普及と安全取扱いの徹底とに多大の貢献をされました。その功績を偲びつつ、博士が司会をつとめられた興味深い座談会の記録の一部を、日本アイソトープ協会の会誌 “Isotope News” 1973年1月号から転載させていただきます。

アイソトープ協会の創業の前後（座談会）

茅 誠司，瀬藤 象二，中泉 正徳

司会 山崎 文男

山崎 本日はアイソトープ協会の会長，副会長がお揃いなので，協会の今昔といったことでも気軽にお話をお願いしたいと思います。まず初めに原子炉で作ったアイソトープがわが国に入ってきた頃のお話などから何か……。

茅 一等最初に仁科先生のところへ，アメリカのフィロソフィカル・ソサエティ（APS）からアイソトープを寄付するということがありましたね。それが昭和25年でしたか。

山崎 昭和24年の11月に米国政府は日本に対してアイソトープの輸出を許可しました。それで，その APS からのアイソトープの最初のものが着いたのが昭和25年の4月でした。そのあと，25年度からは対日援助資金を使って政府間貿易の形でアイソトープが輸入できるようになりました。

茅 その当時，科学技術行政協議会（STAC）というのが学術会議と政府との中間にあって，科学的な施策をいろいろと行政に移すということをやっていた。その中に放射性同位元素部会というのがあって，私が部会長をやったんです。

山崎 26年の1月に仁科先生がなくなられて，そのあと先生がやられたんでしょう，たしか。

それで，この部会では，アイソトープをだれに分けるかということがたいへんな仕事でしたね。

瀬藤 そうだったでしょうね。

山崎 アイソトープを使いたいというときには，一々こういう目的でこういうのに使うということ，技術的にもどれだけ経験があるから使えるんだとかいうことを，研究者が自分で書いて，その最後に千秋さん¹⁾がサインして，米国原子力委員会へ

1) 千秋邦夫氏：当時 STAC の事務局長。

提出した。それから、測定器にもドルの枠があったんですね。その配分もやりました。

中泉 初めはアイソトープというものはこういうもんだということをみんなに PR するというような時代でしたね。

山崎 やっぱり大学が先に使うだろうというんで、東大、その次が名古屋、京都、大阪、それから九州……。中泉先生なんかと一緒にでかけましたね。

中泉 ずいぶん苦労しましたよ。

山崎 GHQ(連合軍総司令部)から参考書みたいなのをくれたのをかついでね。(笑)

中泉 鈴木君¹⁾と一緒にね。あれは26年頃じゃなかったでしょうかね。

山崎 アイソトープの協会ができたのはその年、——26年5月1日。一人一人買おうとハンドリングチャージや荷造料、運賃などが非常に高いものにつくのでまとめて買いなさいと、GHQ からサゼッションがあったのがきっかけで。初めは任意団体で、29年5月1日に社団法人になりました。

中泉 協会ができてから、一番印象に深いのは、講習会²⁾の運営がむずかしかったということですね。たとえば GM カウンターの国産品がなかなかうまく動かないですね。

講習会をやるといったって大学じゃ GM カウンターを持ってないですから、ほうぼうのメーカーから借りてきて実習をやるんですけども、実習を3日か4日やってメーカーによってはその間一度もうまく動かないのがあった。でも、ある会社には非常ながんばり屋がいて、徹夜して動かしたなんていうこともありました。あれは苦労しました。

1) 鈴木嘉一氏：当時 STAC 事務局課長。

2) アイソトープ協会では、創立年の9月に第1回放射性同位元素講習会を開催して以来、主要な事業の一つとして全国各地で活発に各種の講習会を実施した。特に、昭和33年に日本原子力研究所ラジオアイソトープ研修所ができるまでの講習会は、当時わが国唯一の技術者養成の場として、大きな役割を果たし、この基礎固めが現在の RI 利用の発展を支えたともいえる。

山崎 そういうわけで、GM カウンターが日本になかったときにアイソトープが入ってきて、最初はローリツェンのエレクトロスコープでいこうと。大体あれで測定しているいろいろ実験をやったわけですよ。第1回は東大でやったんですね。東大にアイソトープの実験室ができて、あそこを使ったんですね。

瀬藤 ホット・ラボですか、あれを造るのにも骨を折りましたね。通産省や文部省などから補助金を出してもらってやっと出来た。仕事をするのには資金がいる。ほとんどの相手が国立機関であるような協会の仕事には当然国が補助すべきだとぼくは考えて、当時工業技術院の院長をしておった駒形君や文部省の助成課長をやった中西君などに金を出せと言ってね。

山崎 それから、アイソトープの値段のことですが、一般的なものには統一価格をきめましたね。

瀬藤 こういうことなんですよ、ぼくの記憶では。さすがに学者たちだなと思ったんですよ。ぼくはそのときはもう東芝の専務をしておったから、おかしくてしょうがなかった。(笑) 学者というのはこういうふうにまじめなのかと。自分も昔は学者だったんだけどね。

非常にこまかに計算して、あなたのところは幾ら、あなたのところは幾ら、徴収するものが実費計算なんですよ。それでぼくは冗談話に、宴会をやるときに、君は酒を何ばい飲んだから幾らだといって区別して取るわけではないだろう。サイダーを飲んでも、ビールを飲んでも、酒を飲んでもみんな同じ会費じゃないか。それと同じように、あまりこまかいことをいわずに、平均してみんながこれでいいというようにすれば、それでいいじゃないかということをいった覚えがあるんですよ。

つまり、まとめて買えば安い。それだから、一々個別に注文するより安くいけば皆さんが満足してくれるはずだ。だから、その趣旨で少しは置いていってもらような仕組みでも考えたらいんじゃないかということをいって、皆さんが賛成して、それでやっといういろいろ設備が作れるようになったんじゃないかと記憶してるんです。

山崎 たとえば ^{32}P 1 mCi を400円にした。それまでは、今月は20人で買ったので335円になったけど、来月は人が少なかったので460円になるとか、そういうことが

あったんですね。

そしたら大学からおこられてね。値段を高くしたり安くしたりするが一体幾らのものなんだって聞かれてね。毎月毎月違うということはおかしいじゃないかと。それで、国内では平均幾らと。

中泉 その値段の話は、医者仲間では骨身にしみたですね。価格を一定に保つということは、医者仲間では非常にありがたかったですね。

山崎 初めの政府貿易の時代なんかは、STAC の連中が集金に歩いたもんなんですよ。

瀬藤 なかなか払えないのがあったでしょう。教授の名前で申し込んで、教授が転任するとめっちゃくちゃになったというやつね。

山崎 それから、何を払ってくれるのかわからないんですね。大学からはがきがきまして、支払うものがあるから判を持ってこいというのがあって、当時の東大第二工学部（千葉市）まで電車で行ったら電車代のほうが高かったということがあったですよ。

茅 東京大学の支払いがおくれちゃって。おくれてるのをみると東大が一等ひどいんですよ。これは何ともしようがないから、以後は売らないということにしようというんで、「アイソトープ協会会長茅誠司」の名前で「東京大学学長茅誠司殿」という手紙を出すことになった。以後お前のところにはアイソトープを売らないからって。その原案を大学の事務局長に見せて、こういう手紙を出すことになったがよろしいかといったら、まあ待ってくださいよ、といって……。 (笑) それから払いがよくなった。(後略)

b. 第18号所載の「ドイツからの引上げ船上の手紙」

1939年夏、朝永振一郎博士は、日独交換留学生としてライブチヒにあり、湯川秀樹博士はソルヴェー会議に招かれたため渡欧してベルリンにあった。突如としてナチスドイツがポーランドに侵入し、風雲急となったため、在独の日本人は引き上げることになった。以下にかかげるのは、その引上げのあわただしい体験を綴った朝

永博士の仁科博士あての手紙であり、駒込の仁科記念室にのこされている興味ぶかい資料の一つである。(なるべく原文の形をのこしたが、かなづかいは現代かなづかに改めた。)

ドイツからの引上げ船上の手紙

朝永博士から仁科博士へ

昭和14年9月13日発信

靖国丸船上

しばらく御無沙汰致しましたがその後お vari ないことと存じます。先日電報をうちましたから、大体のことは御承知と思いますが、今度は思いがけぬ事態で急に引き上げのこととなりました。もっとも私はすでに2年たっているのですから、もう心のこりはないわけですが、それでもあまりやぶから棒のことで何だかいまだに妙な気もちがしております。湯川君などはせっかく出てこられた矢さきで大変お気の毒なことです。先月25日の夜に総領事館から突然電報を受取りました。それによれば時局がせっぱくしているから、在留日本人引上げのため、靖国丸をハンブルクに待機させてある、至急同船むけ出発されたしとのことです。なにぶんドイツでは新聞は非常に統制をうけているので、事態がこんなとは我々は夢にも思わずドイツ人らも戦争などは百パーセントおこらないと言っているのですから、私もこの電報一本で出発する気にもなれず、とにかく電文ではよくわからないからとベルリンの方へ電話で問い合せて見ましたところ、船は27日未明に出発する、ベルリンにいる連中で大体そこに職務のない連中はもう出発したということでした。そこでその時ベルリンにいた湯川君はどうしているかと思い、同君に電話をかけましたら、宿の人の話に、もうハンブルクへ出たということでありました。その宿には日本人が十人位いたはずでしたが、全部もう引上げたという話です。それで私もあまりのんきにしておられず26日の朝早くからおきて、大急ぎで荷作りをはじめました。そのときにまた領事館から電報で少しも早く船に来いということで、ひるごろどうやら無茶

苦茶に荷物をつめこんで、これをもって駅に行つてあずけ、私はベルリンにまずよつて銀行の方をかたづけに正金へ行きましたら、船は出帆をまた早めて明朝でなく今夜にしたということです。そこでまたいそいでハンブルクへ行きました。さいわい荷物はもう駅についておりましたが、当時赤帽がちょうはつされたらしく、大きな駅にたった2〜3人より赤帽がおらず、手荷物引渡し所の役人たちもたった4〜5人でやっていて、一向らちがあかず、人々は引渡し所の前にたかつていて順番をまわつては出帆に間に合いそうもないので無理に自分で荷物おき場の中に入れてもらつて、役人に少しお金をやつて、とくべつにはこび出してもらいました。船についたのは出帆の15分位前でした。船はまずノールウェイのベルゲンに行き、ここで様子を見ておりました。事態がこれでおさまればまたハンブルクにかえる、そうでなければパナマをへて日本へ向かうということです。ベルゲンに約一週間おりましたがそのあいだにとうとう英仏が宣戦しましたので船はハンブルクにもどらぬことになりました。しかし船はパナマに行く前にニューヨークによりますのでアメリカに上陸できるかと思つておりましたがヴィザをとる間がなかったので、これもどうかわかりません。しかし今は全く危険区域をぬけましたからあとは船に身をまかせてかえる次第です。この船は多分10月の中ごろ日本につくことになるでしょう。アメリカに上陸出来ればまたいくぶんおくれるかもしれませんが、いずれにせよ間もなくお目にかかれることとたのしみにしている次第でございます。

右ちょっとおしらせまで

9月13日

朝永振一郎

仁科芳雄様